世界津波の日

高校生サミットの評価は

官民協働の防災活動の成果

坂本（さかもと）　あや　議員

問 本町で行われた「世界津波の日」の記念行事、「高校生サミット・イン・黒潮」は成功裏に終わったと思うが、どのように評価しているか。

答 大西町長

参加した高校生の姿勢に感銘を受けた。自国の防災を追及するために日本の防災を学びに来た高校生は、２００４年スマトラ島沖地震インデオ大津波によってご家族を失われていた。東日本大震災を、小学生のときに経験した高校生からは、被災者の最後の姿を目撃するなど、辛い報告もあった。しかし、サミットにお越しいただいた皆さんに議決いただいた黒潮宣言は、自分たちがこれから生きていく上で指針となるひとつの宣言文ではないかと、非常に評価をしている。

問 会の運営は、具体的にどのように進められたのか。

答 畦地教育次長

外務省から、「通常は専門部署を作って、2年くらい準備をするものだ」と言われた。

準備期間が半年少しかなく、通常の業務をしながら事に当たったので、職員には本当に無理を言ったが、完璧にやっていただいたと思う。

町民の皆さまには、歓送迎の盛り上げ隊として、25日歓迎の時から27日早朝、雨の中での見送りまで、サミットに対応していただいたお陰で大成功に終わった。感謝を申し上げたい。

田の口小学校だけではなくて、沿道、また自宅の窓からも手を振って送ってくださったことで、バスの中では歓声が上がり、中には涙を流している生徒もいた。

問 この大会が本町で開催されたのはどういう理由からか。

答 大西町長

サミットの開催地として決定いただいたのは、日本一の想定を突きつけられたからだとよく言われるが、明らかに間違いだ。選定をいただいた最大の理由は、その日本一の津波高の想定が突きつけられながらも、官民協働で防災対策を進めてきたこの町の評価をいただいたからだ。つまり、住民の皆さんが進めてきた防災が評価されてサミットの開催地となったということで、住民主導でサミットを誘致したといった非常に珍しいケースになっている。

また、今回のサミットレベルの運営については、職員地域担当制等々で防災を進めてきた数年間の中で、行政組織としての組織力に評価を受けたと思っている。実際にそのような評価をいただき、今回のサミットの誘致につながったと考えている。

外部からは、自分たちのふるさとを否定されるような時期があった。それをきちっとこの4年半でひっくり返すことができ、最大の節目がこのサミットであると思う。最終報告書をしっかりと分析し、自分たちのまちづくり、あるいは防災にしっかりと生かしていくこと、これが自分たちに求められている姿勢だと思っている。

歓迎のスピーチをする大西町長